

「実によって木を知る」

2015年06月09日

ルカによる福音書 6章43節～45節。「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。茨からいちじくは採れないし、野ばらからぶどうは集められない。善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す。人の口は、心からあふれ出ることを語るのである。」

主イエスは「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない」と、木の良し悪しは結ぶ実によって分かると言われる。良い木は根が深く、地から養分を十分に吸い上げ、葉を茂らせて太陽を浴び、良い実を実らせる。木はそうであろう。植木屋さんから、苗木を買う時は幹や葉を見ずに、根がしっかりしたものを買いなさいと言われたことがある。人間も、良い家庭環境で育った子どもは良い成長をし、立派な人間になれる。豊かな感性と深い知性と多様な文化を経験する環境で育つと、視野の広い、奥行きのある思想と確かな言葉を持った人になることができる。しかし、悪い家庭環境で育った子どもでも、立派な大人になる場合がある。劣悪な生育環境の中からも、立派な人格者になった人に出会い、感嘆することは数知れない。悲惨と苦難を肌身で経験することによって、人の悲しみを理解し、隣人と共にあろうとする柔らかな心を得たからである。逆に、恵まれた環境で育ちながら、偏屈になった人を見ることも多い。恵まれた環境に甘え、他人のことに関心を持たず、自己中心に育ったからである。木においては正直に、良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶであろう。しかし、人間においては、主イエスの御言葉に反して、必ずしも、そうでないことがある。人間は固定的ではなく、多様に変わっていく。それが、人間であることの妙味ではないか。

「茨からいちじくは採れないし、野ばらからぶどうは集められない」に関しては異議はない。木はその木からしか、その実は結ばない。

次に「善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す」と言われる。善い人は良い心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを出す。確かに、そうであろう。善い人の言葉と行いは周りに「愛」の喜びが広がる。しかし、この御言葉に関しても、善い人と悪い人を簡単に区別できるものかと思う。人間には、福の顔をしていても心に「邪」があり、邪の顔をしていても心に「福」がある場合がある。心は多面的で、善悪に二分化できないのではないか。

旧約聖書では神に「祝福される者」と「呪いを受ける者」が厳しく分けられている。新約聖書でも「神の国に入る者」と「永遠の火の地獄に行く者」が右と左に分けられている。この二分法を承服しかねる。良い木になって良い実を実らせ、善い人になって良い倉から良いものを出すようにとの諭しを語った言葉としては理解できる。しかし、悪い木で、悪い人である私は救いようがないと、断罪されると立つ瀬がない。人間は変わりうる。その希望において、私のような者でも可能性はありませんかと言いたい訳である。

最後の「人の口は、心からあふれ出ることを語るのである」という御言葉は確かである。心にあるものが口から隠しようもなくあふれ出る。あふれ出た言葉の真偽を判別する知恵を持ちたい。そして、イエスはキリスト（救い主）である、この方の愛を信じ、愛に倣って生きたいと告白する者でありたいと願っている。